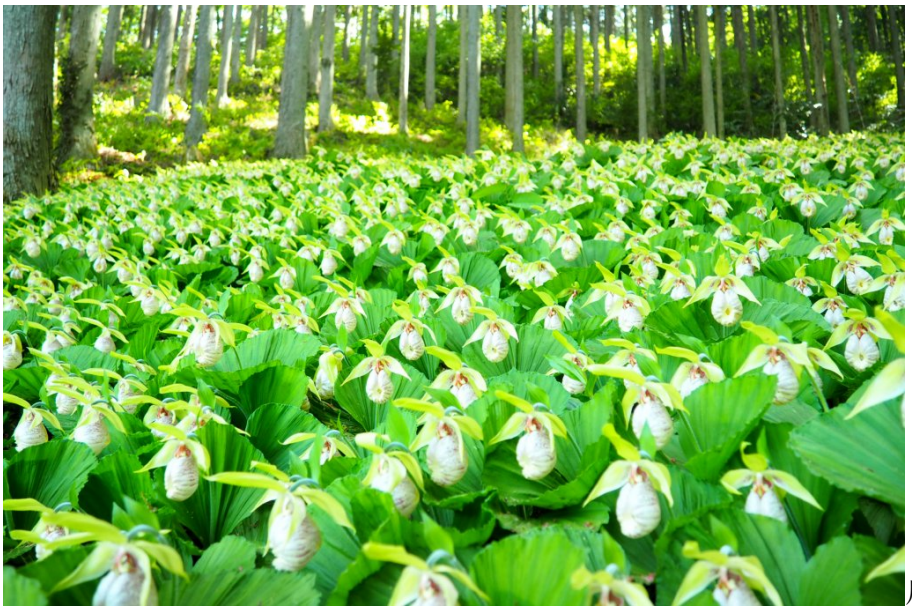
(「花の言葉に耳寄せて」Part 17)

クマガイソウの巻

私は日経新聞の切り抜きを続けているのですが、5 月 14 日版に「福島の山中で 5 万株満開　絶滅危惧種のクマガイソウ」という見出しがある記事を見て「おや？！」と思いました。東芝を定年退職後に、妻方実家があった福島県いわき市に本拠を移して 10 年間も日本語教師をしていましたので、「福島は第二の故郷」と思っていたのですが「クマガイソウ」の名を聴いたことがなかったからです。早速インターネッ美とトで検索したところ、下のようなクマガイソウ群落満開の写真が手に入りました。そして、この元気な花姿を見て「どうしてこれが絶滅危惧種なの？」、はたまた、熊の人里への出没が話題になっている昨今、「どうして“熊がいそう”と間違えてしまいそうなクマガイソウという名前がついているんだろう？」と思い、久方ぶりに「花の言葉に耳を寄せてみよう」と思いました。



月

そこでまずは、即興俳人の高幡大馬王殿に、これまた久方ぶりに電話して、即興俳句を花の言葉に添えてもらおうと思いました。相変わらず明るい声で電話に出てきた高幡大馬王殿は、「今、金沢行きの新幹線の車中にいます。」とのこと。相変わらず、外国人対象のガイド業は大繁盛のようです。そこで、「クマガイソウって花知ってる？」と問うと案の定 Not yet だとのこと。「でも、何とか調べて俳句作ってみます。」とのことでした。そうか、それじゃ、高幡大馬王殿が金沢から帰ってきてから記事をまとめようとノンビリ構えた矢先に次のようなメールが送られてきたのでビックリしました。何たる早業！ついさっきまで新幹線車内で外国人観光客相手のガイド業にはげんでいたはずなのに。「そうか、このような Speedy な Support 情報の提供を行う Service 精神こそがマーケティングの極意なのだ」と、その昔書物で読んだことがあるなと思いました。

佐々木さん　どうも！！　　ただいま　金沢です。

熊谷草（くまがいそう）初めて聞きました。調べましたら晩春の季語でした。そようとの形から、ほてい（布袋）そう、ほろ（母衣）かけそうとも呼ばれるとも。
丁度、金沢に来るタイミングでこの季語に触れたのは、何かのめぐりあわせかと思いました。金沢といえば、加賀百万石、その藩祖は前田利家、利家をまつった金沢の有名な神社は尾山神社、尾

山神社には前田利家が織田信長の部下で血気盛んだったころの、母衣（ほろ、敵に後ろから弓で狙われないように背負った大きなバルーン）を背負った利家の銅像があります。というわけで「熊谷草」 の傍題 「ほろかけそう」で一句。

利家も　若きときあり　ほろかけそう　　高幡大魔王

利家と言えば、加賀藩の藩主としての盤石なイメージとナマズのような肖像画のイメージがありましたが、その銅像を初めて見たときに、「あんな利家にもこんな若い時期があったのだな～」と感じたことを思い出しました。

その銅像のとなりに　まつ　の像もあります。NHKの大河ドラマで、利家（唐沢利明）とまつ（松島奈々子）をやったときに増設されたものです。やんちゃな若い時を過ごして、あんな夫婦になりたいものです。というわけで、もう一句

利家とまつ　になりたや　ほろかけそう　　高幡大馬王

明日は、五箇山、白川郷を抜けて、高山です。　　では！！

さて、この 「ほろかけそう」の別名を持つ「クマガイソウ（熊谷草）」は、ラン科アツモリソウ属に分類される多年草の 1 種なのだとか。右のクローズアップ写真でご覧いただけるように、花弁は 5 枚の細い楕円形で緑色を帯び、10cm 程に大きく膨らんだ唇弁は袋状で白く、紫褐色の模様があり、唇弁の口は左右から膨らんで狭まっています。そして、扇型の特徴的な形をした葉が対生するように二枚つき、40cm くらいの草丈で群生しているのです。群生した花を見ても感激しますが、一つ一つの花を観賞しても、毛品のある姿に心打たれるのではないでしょうか。

さてこの花名の「クマガイソウ」とその属名の「アツモリソウ属」の由来は、源平合戦に登場する熊谷直実（くまがい なおざね）と、一ノ谷の戦いで彼に討たれた平敦盛（たいら の あつもり）に因んでいるのだそうです。そして、花の唇弁の形状が、熊谷直実と平敦盛がともに背中に背負っていた母衣（ほろ）に似ているところから「母衣（ほろ）かけそう」という別名もできたようですね。熊谷直実は、武蔵国熊谷郷（現・埼玉県熊谷市）出身で、平家に仕えていたのですが、石橋山の戦いを契機として源頼朝に臣従し御家人となり、源頼朝をして「日本一の剛の者」と言わしめたほどの武将です。一方の平敦盛は、平清盛の弟・経盛の末子(3 男)に生まれた平家直系の若武者。そして「WEB 歴史街道」には、最初にして最平家後となった熊谷直実と平敦盛の出会いの場となった一ノ谷の戦いの場について以下のように記述されています。

義経の奇襲が成功して平家方が総崩れとなると、敦盛は郎党らとはぐれてしまい、やむなくただ一騎、沖の船を目指して馬を泳がせます。ところがそこへ、「大将軍と見参らせ候え。敵に背中を見せるとは卑怯なり」と声をかけた者がいました。源氏方の武蔵武士・熊谷次郎直実です。敦盛にすれば、挑発的な言葉を無視して、沖の船に向かうこともできました。しかし彼は、武士の誇りを捨てて生き延びるよりは、己の武士の名を惜しむことを選びます。 海から取って返し、熊谷直実に勝負を挑んだ敦盛は、波打ち際で直実に組み付かれ、落馬します。取り押さえた直実が首を掻こうとしてよく見ると、相手はまだ16、7 の紅顔の美少年。自分の息子ほどの年齢です。さすがの直実も哀れに思い、手にかけることをためらいました。しかし、その背後には、すでに土肥、梶原ら味方の軍勢が迫り、直実を注視しています。もし、直実が見逃した.としても、すぐに別の者が襲い掛かることは明白でした。逡巡する直実に敦盛

は、自分が誰であるかは名乗らずに「お前のためには良い敵である。名乗らずとも首を取って人に見せよ。さあ首を取れ」と促し、直実は「ならば我が手にかけ、後の菩提を弔い申そう」と、泣く泣く敦盛の首を掻き切りました。

熊谷直実は、自分の息子とほぼ同年齢の平敦盛討伐を機に、自分が犯してきた“戦非ずば侵さざりき”数々の殺戮を忌まわしく回顧して出家し仏道に身を転じたのだそうです。私はこの一ノ谷の戦いの故事を学んで、直実が感じた武士の生業による無益な殺戮に対する想念が、時代を経て日本に与えられた“勝つにせよ負けるにせよ“戦争非ずば侵さざりき”殺戮と破壊に対する悔恨と嫌悪の念と一脈通鶴ところがあるように思え、群生して開花して入っる熊谷草の姿が、不戦を訴える日本国憲法を背に「安保反対」のシュプレヒコールを唱和していた私たち学生デモ隊の姿に重なって見え、その上、凛としてしかし優しく咲く熊谷草が、64 年も昔の今月今夜頃(1960 年 6 月 15 日)に、国会構内に立ち入って私の近くでデモ隊のスクラムラインに加わっていながら警官隊と衝突した際に亡くなられた樺美智子さんの姿を映しているように思えてきました。

ですから、熊谷草の花言葉には、さぞやこうした想念や思考の念が汲み入れられていると思いきや、並べられていた花言葉に含まれていた文言は、「気という大字名馬がいまぐれな貴婦人」、「見かけ倒し」、「闘志」といった“武士の生業”とは何のかかわりもない文言だけでした。熊谷草は、“Cypripedium japonicum Thunb”という学名（生物学の手続きに基づき、世界共通で生物の分類群に付けられる名称）が付されているところから察して日本特有の花だと思えるのですが、海外版の花言葉がつけられていて、そこで用いられている英語表現が単純に和訳されただけのものだったようですね。

熊谷草は、北海道南部から九州にかけて分布して、低山の森林内、特に竹林、杉林などに生育し、大きな群落を作ります。盛大に咲き競う群落の様子を見ると、とても元気な花で、なぜこれが絶滅危惧種に指定されているのかわからないのですが、熊谷草に際立った土壌に対する親和性があることが原因なのではないかと私は見ています。熊谷直実の故郷（現在の埼玉県熊谷市）では、有志が 1979 年に「くまがい草保存会」を結成し、庭園の星溪園などに植栽したのですが根付かず、鉢植えなどを除いて絶えてしまったため、保存会は 2014 年に解散してしまったそうです。

新聞で「福島の山中で 5 万株満開」と報じられていたのは、平家の落人が居を構えたという福島県いわき市田人町にある日本最大級の群生地だとのことでした。「田人」は「旅人」から発した地名なんだろうと思います。現に田人町旅人（たびとまち たびうと）という大字名も残っています。毎年ゴールデンウィークの頃に「クマガイソウの里まつり」が開催されるそうです。「来年はきっと君たちの平和を訴求する姿を見に行くからね」と写真の満開の熊谷草に声を掛けました。思えば私も来年は 84 歳で絶滅機種相当の年回りです。不戦を誓った日本国憲法も、歴史観も世界観もまるで乏しい政治家たちのお陰で絶滅機種の立場に立たされています。絶滅機種同士がうち揃って、世界に誇る平和憲法を擁する 「不戦国家日本」の誇りをともに謳いあげなくてはと思っています。